令和４年度　学校自己評価システムシート　（ さいたま市立上大久保中学校 ）　　学校番号　２１７　　【様式】

目指す学校像	「温かい学校　感動あふれる学校」　・時を守る　・場を清める　・礼を正す

重点目標	
	１　確かな学力の育成を図る授業の工夫・改善、家庭学習の定着化 ２　子どもの健康と命を守るための諸活動の充実、自己肯定感を高める教師のかかわりの推進 ３　コミュニティ・スクールの浸透、熟議を通した目指す生徒像実現のための方策と行動の共有 ４　信頼される教師を実現するための研修の充実と働き方改革の一層の推進

※重点目標は４つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目は複数設定可。
※番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

達成度			
	A	ほぼ達成	（８割以上）
	B	概ね達成	（６割以上）
	C	変化の兆し	（４割以上）
	D	不十分	（４割未満）

学校自己評価								学校運営協議会による評価
年度目標					年度評価			実施日令和５年３月１日
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	学校運営協議会からの意見・要望・評価等
1	（現状） ○全国学力・学習状況調査では、国語の平均正答率は全国の平均と同じで、数学は全校平均を４ポイント下回っている。 ○市の学力状況調査において、学習に対する関心・意欲・態度に関する質問に、数学だけ肯定的な回答をした生徒の割合が市平均に比べて低い。 ○市の学力状況調査において、「1 日あたりの勉強時間」及び「1 日あたりの読書時間」が昨年度比６ポイント減少している。 （課題） ○数学への意欲・関心が高まっておらず、生徒が数学を学習することの意義や楽しさを実感できるようにすること、達成感や充実感が味わえるようにすることが課題である。	・確かな学力の育成を図る授業の工夫・改善	①数学への意欲・関心を高めるとともに、基礎基本の定着を図るために、年 5 回、全校一斉での数学の確認テスト（SMD）を実施し、当該学年で習得すべき式の計算ができるようにする。 ②全国学力・学習状況調査について、生徒が自己採点を行い、その結果をタブレットに入力することで、自らの学習状況を把握できるようにする。 ③読解力向上の研究発表に向け、全教科の授業を通して資料を読み取り、必要な情報を適切に判断し、収集して自分の考えを表現できる力を身につけさせる。	①SMD テストで、正答率を８０％以上とすることができたか。 ②生徒が、自己採点の結果をもとに、自らの学習状況をつかみ、目標を立て、達成に向けて行動できるようになったか。 ③全国学力・学習状況調査の該当項目を昨年度より向上させる。	・SMD テストの全体の平均点は７３点だったが、８０点を超える回もあった。個々への細かい指導について、１，２年生は少人数指導を通して行った。その結果、生徒の SMD への意識を高めることができた。 ・自らの学習状況は把握できるようになっているが、自ら目標を立て、達成に向けて行動できるようにまでは至っていない。 ・全校、全教科で「読解力向上」に向けて取り組んだ結果、「読む力」だけでなく、「書くこと」も全国学力・学習状況調査の結果が１１ポイント上昇し、「書く力」が身についてきた。	B	・今まで積み上げてきた、SMD テストや読解力向上の研究成果を引き継ぎながら、「基礎学力の向上」について、「教科横断的な指導」の観点から、研究を進めていく。 ・ベテラン教員が少なく、指導方法について先輩から学ぶ機会が少ないので、指導者を招き、指導法の研修を実施する。	・単なる基礎学力の定着だけでなく、社会に生きる人材に育つ授業をしてほしい。 ・家庭学習の定着度を図る際に基準をはっきりさせて生徒や保護者に聞いているのか、学校評価の中での問い方をもう少し工夫するとよいのではないか。 ・読解力向上で得た力がどのような場面で活かされているかしっかりと吟味し、生徒の変容を評価してほしい。 ・家庭学習の在り方を小中連携のもと考えていく必要がる。
		・家庭学習の定着化	①スタディサプリを活用しての学習法について丁寧に説明するとともに、学習履歴を基に、生徒が目標をもって家庭学習ができるように支援する。	①学校評価（生徒アンケート）の結果、家庭学習をしていると答える生徒が５割以上とすることができたか。	・家庭学習をしていると答える生徒は５割を超えたが、保護者はそうは感じていないという結果となった。	B	・家庭学習については、スタディサプリの効果的な活用の研究と各学年で積極的な活用を促していく。	
2	（現状） ○全国学力・学習状況調査において「学校に行くのが楽しい」の質問に肯定的な回答をした生徒は、市の平均を上回った。 ○学校評価（職員アンケート）から、検温・消毒・感染対策は徹底されているものの、従来の安全点検が適切に行われていないとの回答が多かった。 （課題） ○「学校に行くのが楽しい」と回答する生徒の割合は多い一方、心と生活のアンケート結果から自己肯定感の低い生徒も多いため、きめ細かな生徒の自己肯定感を高めるための支援・相談体制が課題である。	・子どもの健康と命を守るための諸活動の充実	①　安全点検の確実な実施と管理職による見届けを徹底する。また、食物アレルギー対応、新しい生活様式、心のサポート等の様々なマニュアルについて再確認する。 ②生徒の生徒指導や教育相談に係る情報を ICT で共有し、蓄積した情報を基に生徒の状況を全職員で共有し、適切なタイミングで組織的に支援、相談が行えるようにする。	①重大事故ゼロが達成できたか。また、学校評価（職員アンケート）の安全点検の項目の肯定的な回答を９０以上とすることができたか。 ②学校評価（職員アンケート）において、関連する項目の肯定的な回答の割合が８０％以上となったか。	・安全点検の項目の肯定的な回答は９２％で目標を達成することができた。また、重大事故ゼロも達成することができた。 ・生徒指導や教育相談についても、肯定的な評価が９０％を超えていたが、個々の対応については課題もあり、引き続き組織的に支援、相談が行えるように努めたい。	B	・学校生活も、元の生活に戻りつつあるので、学校行事や部活動を充実させることにより、生徒の活躍の場を増やし、自己肯定感や自主性を高めていく。	・子どもたちが何のために学校に来ているのか分かっているか、学習の意義や、目的をしっかり伝えてほしい。 ・特別支援学級の生徒がもっと通常学級や部活動等で交流が持てるようにしてほしい。それが SDG 等の取り組みにもつながっていくのではないか。
		・自己肯定感を高める教師のかかわりの推進	①さわやか相談室の役割を見直し、相談が必要な生徒と学習支援が必要な生徒の住み分けを行い、個に応じた支援ができるようにステップアップルームを開設する。	①　ステップアップルームを開設し、校内で連携しながら個に応じた支援が行えたか。	・不登校生徒等のためのステップアップルームを２学期より開設することができた。さわやか相談員やＳＣ、教育相談担当教諭等、ＳＡとよりよい運営に向け連携を図りながら取り組むことができた。	B	・さわやか相談室の利用の仕方や、ステップアップルームの課題について確認し、全職員で共通理解が図れるようにする。	
3	（現状） ○昨年度、学校運営協議会準備委員会を立ち上げ、組織づくり並びに目指す生徒像について共通理解を図った。 ○学校だよりやホームページでコミュニティ・スクールについて発信したが認知度は低い。 （課題） ○昨年度は、書面開催が多く、充分な熟議が実施できなかった。今年度は、本校の生徒に身につけたい力について、熟議を重ね、その実現に向けた方策を定め、継続的な実施に向けた一歩踏み出す。 ○コミュニティ・スクールの背景や役割について、文書やホームページで発信するだけでなく、別な方法を模索する。	・コミュニティスクールの浸透	①学校運営協議会は、可能な限り書面開催ではなく、実際に熟議や意見交換を行い、共通理解を図り、コミスクの機運を高める。 ②　学校だよりやホームページだけではなく、保護者会で話をしたり、PTA や地域の広報紙にも掲載を依頼し、啓蒙及び理解に努める。	①　対面で 3 回開催し、活発な意見交換と具体的方策について協議できたか。 ②　学校評価の関連項目の肯定的回答を昨年度より向上できたか。	・本校独自に地域・保護者・教員にアンケートを実施し、CS の課題を明確にしたうえで、学校運営協議会を開催できた。 ・関連項目は昨年度より６ポイント向上したが、保護者への聞き取りでは、理解が深まったとまでは言えない状況である。	B	・学校だよりや HP を見ない家庭も多く、取り組み内容が見えづらい面がある。学校独自の横断幕を作成したり、公民館の掲示板や自治会の掲示板等も視野に入れながら、連携しながら取り組みたい。	・小中連携としてあいさつ運動を復活させたい。互いの交流とともに自己肯定感も上がっていくのではないか。 ・少しずつ育成会の活動を元に戻していきたい。地域と生徒が一体となって取り組める活動を増やしていくべきだ。 ・上大久保中チャレンジスクールで過去にお世話になった卒業生が、講師として戻ってきている。また、地域に貢献したいという社会人の方も多数いる。 ・学校運営協議会（コミュニティスクール）では何をしているのかを保護者や地域に情報をもっと発信すべきだ。 ・保護者にとってコロナの影響で学校が遠いものになっている。保護者が学校に来る機会をもっと作るべきだ。
		・熟議を通した目指す生徒像実現のための方策と行動の共有	①　アンケートを実施し、学校・保護者・地域で「身につけたい力」を共有し、具体策について協議する。 ②　具体的な行動スケージュールを立て、地域と学校が共同歩調で取り組めるようにする。	①　アンケートを実施し、「身につけたい力」を共有できたか。 ②　協働作業を地域と保護者・学校が共同歩調で取り組めたか。	・学校・保護者・地域で「身につけたい力」が違い、熟議でも、一致した方向性を見出すまでには至らなかった。 ・今までやってきた協働活動を着実に実行することにより、地域・保護者と学校が共同歩調で取り組むことができた。	B	・学校の教育方針・取組について、保護者、地域とも関心が高い。また、地域の方も「地域の子どもを地域で育てていきたい」との思いをもっている。しかし、実際の生徒への対応では注意ができないと考えている方も多い。具体的な生徒への対応の仕方や支援の仕方、学校が求めている協働作業がどのようなものかを示していくようにしたい。	
4	（現状） ○エバンジェリストを中心とした、ICT の活用やハイブリッド授業については、定着を図れた。 ○タブレット端末やスタディアプリを導入するための教員の研修が十分ではない。 ○仕事にストレスを抱えている職員がいる。 （課題） ○計画訪問や研究発表と ICT の活用をリンクさせながら、どのように教材研究や準備を進めていくことと、放課後の時間の確保が課題である。	・信頼される教師を実現するための研修の充実と働き方改革の一層の推進	①読解力向上の研究発表に向け、全職員が ICT を活用した授業を年間計画に位置付ける。 ②ICT 研修は、実際の授業を通しながら OJT で行う。また、長期休業中に計画し、平日の負担軽減を図る。 ③人事評価シートに業務改善のための方策を記入し、PDCA を意識して取り組めるようにする。	①　全教科で、年間計画へ ICT を活用した授業を年間計画に位置付けることができたか。 ②　学校評価の関連項目の肯定的回答を昨年度より向上できたか。 ③　教員等の勤務に関する意識調査において、負担感率を７０％以下にすることができたか。	・定期的に教職員事故や不祥事についての情報を発信したり、服務に関する研修を毎学期に１度行った。また、教員が見通しを持って計画的に行事や授業、校務分掌を実施できるように教務主任と連携しながら、早めの提案等に努め、定期的な声掛けや相談などに取り組んだ。ＩＣＴ機器も活用し、研修に取り組んだり、教材や校務分掌の資料等の共有など図ることができた。その結果、学校評価の教職員アンケートでは行事や授業、校務分掌の準備期間や負担感に関わる項目において、８０％以上の肯定的な回答が得られた。	B	・来年度に向けては一部教職員の仕事の偏りをなくし、教職員の仕事の均一化が課題である。	・先生方にも生き生きと仕事をしてほしい。子供たちの身近にいる大人として子供たちに夢を語ってほしい。そのことで子どもの自己肯定感も上がるのではないか。